



卷 頭 言

星霜を積む事10有9年、早や本會も誕生以來もうこんな年月を経たのである。19年の年月は、人間を中心に考へれば、決して短い時間ではない。本會創立の時孤々の聲を擧げた者は、もう青年の域に達し、血氣盛りであつた者はもう分別盛りの人間になつて居り、働き盛りであつたものは、早や霜白の髪をいたゞいて居るかも知れない。又、多くの會員が最初から今も猶ほ續いて會員であらうが、中に或者は、既に白玉樓中の人となつたものもあれば、又極めて新しい會員もあらう。

更に其れよりも驚くべきは、社會と云ふものの變遷である。しかし其れを論ずるのは本會のテーマに屬すべきではない。たゞ其の間に在つて、本會が天文と云ふ事を通じて過去に残した業績には無關心では居られない筈である。然し吾人は敢て其れに言を及ぼさない。今は一切“語るよりも行へ”である。強いて求むるなれば未來の現在化に於てのみである。

云ふ迄もなく、現今の日本は非常時下にある。超非常時である。幾多の英靈を聖戰に献じ、幾多の傷病勇士を東洋平和の爲めに捧げ、又幾多の應召者をば聖苦へと歡送して居る。然も猶ほ是のみでは無い。

天文の同好者に依つて維持し、持續されて居る本會が、如何なる歩みを更に爲すべきか？ 世は“天文”なるものに付いて問ふかも知れない。又本會の現下に於ける役割をも問ふかも知れない。或る意味で“天文”の會と云ふものの立場は困難になるかも知れない。

7
3 天象は大同小異を以て、やはり繰り返へされるであらう。其處には正しさもあらう。美もあらう。慰ひもあらう。が然し、其れ丈けでは答へられないと思はれる。いづれにせよ、先づ、現實と思索との順逆兩關係に回轉する“天文”の爲すべき、正しい文化的使命を把握する事が急務である。